

2013年4月25日
全2頁

これならわかる  経済の仕組み 第9回

分業のひろがり

常務執行役員
岡野 進



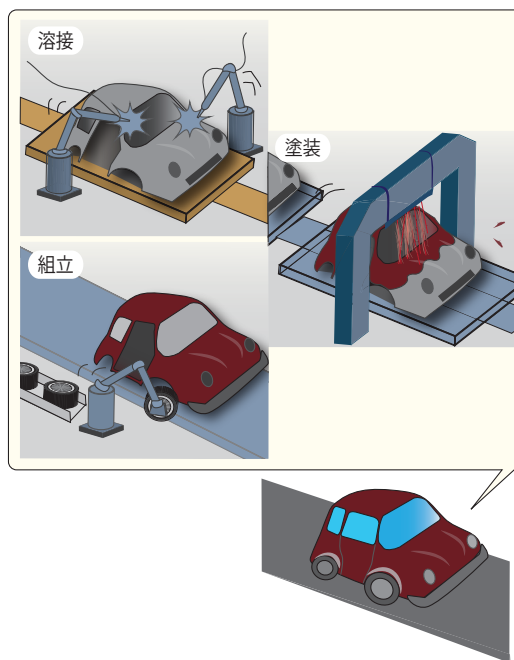
経済の発達には分業のひろがりなしにはありませんでした。現代の経済は、主な経済活動全体が分業で成立しているといっても過言ではありません。分業はなぜ経済の発展に役立ったのでしょうか。事業所あるいは企業の中での分業、さらに社会全体での分業ということについて、考えてみましょう。

経済成長を支える生産性上昇に寄与した要因としては、科学技術の応用による生産の機械や新製品の出現とともに、それを可能にした分業のひろがりも注目されます。手工業の発達の中で、手工製品の生産には、個人個人の熟練が生産性をあげるために大切であることから、専門家として職人が生まれてきました。

たとえば、農業が主体の経済だった時代にも、専門的職人として鍛冶屋が存在しました。鍛冶屋は鋤、鍬などの農機具や刃物類などの鉄製品の製造、修理を行うのですが、農家が自家で行うよりも熟練度の高い専門の職人が行うことによって生産性が高まります。専門的な職人の職業が成立すると、職人個人の熟練度が高まるだけでなく、技術の高度化とその伝承も可能となったと思われます。こうした現象が様々な分野にも広がっていたことが経済全体の生産力を高めたと考えられるでしょう。これは社会全体の分業の萌芽ともいえるものだと思います。

ところで、分業とはいっても、ひとつの事業所あるいは企業の中での分業と、経済全体で様々な事業体がそれぞれ関係する事業を担っているという分業とに分けることができます。

前者のタイプの分業について考えてみましょう。まず何かの製品を製造する工程において、様々な工程を経て製造されるものについては、それぞれの工程を分業することによって効率的に大量生産が可能になることが多いのです。たとえば、自動車の製造工程を考えてみましょう。車体を製造する工程では、鉄板をプレスして成形する工程、溶接によって製造する工程があり、それぞれに分かれています。塗装工程では、①前処理+下塗り塗装、②シーリング、③中塗り塗装、④上塗り塗



装というふうに段階を追っていきますが、これもそれぞれの工程が分業されます。並行してエンジンをはじめとする部品がそれぞれ生産されます。さらに組み立てラインでも順番に多くの部品を取り付けて組み立てを進捗させていく工程が多くあり、分業による作業で行われているといえます。現代では多くの工程が機械化され、ロボットが導入されていますが、機械化されれば、余計に工程を流れ作業で分業することが効率的になります。

工場の中での分業だけでなく、企業の中における部門間の分業も発達してきました。ある程度の規模の企業の場合、直接に商品を生産したり、サービスを提供したりする部門のほかに販売部門や間接部門も必要です。またそれぞれの部門の中にも分業があります。また、最近では、従来は企業の中にあつた事務の業務などで定型化できる部分を、専門的に行ってくれる外部の企業に委託すること（アウトソーシング）も多くなりました。

後者のタイプの分業は、経済全体、社会全体での分業です。これが発達することは、貨幣経済の発達が前提になるでしょう。分業による商品やサービスの提供は、市場の機能を経て、販売＝貨幣との交換で行われるからです。貨幣経済なしでは、違う事業者間の分業はうまくいきません。また貨幣経済が発達し、市場の機能が働くことで、価格と数量の調整が行われ、分業もうまくいくのです。こうした社会全体の分業では、分業する事業者の組み合わせは固定的ではありません。需要側は同じ質のものであれば価格の安い供給者を選びますし、供給側は高く買ってくれる需要家を優先することになります。

同一の製品を作る事業者を産業としてまとめてみると、分業関係は、産業間の取引としてみることができます。一方の産業から供給されるモノやサービスがもう一方の産業において材料、エネルギーや部品、生産するのに使用されるサービスとなるので、これを中間投入と呼んでいます。お互いにモノやサービスを供給し合っているため、各産業を行と列に配置し、産業間の取引額を該当するセルに記述したマトリックスを作成できます。これを産業連関表¹と呼んでいます。産業間の取引額を需要側の生産額で割った係数（投入係数と呼ぶ）をみることで産業間の依存関係の強さがわかり、需要がどのように波及していくかも分析できます。

実際に作成されている産業連関表では、個人消費、企業設備投資などの最終需要で何を使っているか、ということも表されます。また各産業の生産額から中間投入を除くことで付加価値を計算できます。産業の生産額や付加価値額のウェイトもわかります。多くの国で5年に1回作成される基準年の産業連関表は、GDP統計などをつくるおおもとの統計にもなっています。

（以上）

1) 産業連関表は、1936年アメリカの経済学者 W.W. レオンチェフによって考案され、有用性が認められたことから、広く世界で使われるようになりました。レオンチェフは、その功績により1973年にノーベル経済学賞を受賞しました。

経済の広場「経済指標を見るための基礎知識 第8回 SNA全体の理解のために（その1）」（2013年2月7日）
http://www.dir.co.jp/research/report/place/indicator/20130207_006780.html
もご覧ください。